
魔法戦士リリカルガンダム

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦士リリカルガンダム

【Nコード】

N2537BA

【作者名】

紅優也

【あらすじ】

様々なガンダムキャラクターがリリカルなのはの世界を改変しようとする転生者を叩きのめすお話です。

プロローグ？（前書き）

スタート・インパルス
始まりの激情

プロローグ？

シンSIDE

「う……ん……？」

あれ……此処は……何処だ？」

俺『シン・アスカ』は周りが何故か『エターナル』の私室では無く何処かの町の路地裏なのに驚いているけど……あれ？

「俺……何で『子供』になつてんだ？」

近くの水溜まりに寄つて顔を見るとそこには紛れもなく九歳になつた俺がいた。

「……はあ……金も無い、情報も無い、身寄りも無いの無い無い尽くし……？」

何だあれ？」

俺は起きた場所の直ぐ近くにキラキラ光る宝石を見つけてそれを手にとって見る。

「すっげー綺麗だな……よし！

此れを売つて当座の……「ちよつと待て……！」「うわ……？」

俺が声に振り向くとそこには銀髪に碧と深紅のオッドアイの今のところの同い年のガキがいた。

「てか、何のようだよ……！」

「うるせえ！黙つて俺にその宝石を寄越しやがれ……！」

「はあ……？何でお前の命令を聞かなきゃいけないんだよ……！」

大体この宝石は俺の生命線だ、絶対に渡せるか！

「あんだと……？神に選ばれた最強転生オリ主の俺に逆らうのか？」
……は？何を言ってるんだこいつ頭おかしいんじゃないのか？
最強転生オリ主とかマジ笑えんだけど。

「お前頭に蛆虫でも湧いてんのか？」

最強転生オリ主とか漫画や本の二次創作の話だけにしとけての。」

「うるせ……あ、あの！」お、来たか。」

俺達が声に振り向くとそこには金髪にルビーみたいに綺麗な深紅の瞳の女の子とオレンジ色の毛皮が綺麗な狼がそこにいた。

「あの……その宝石をくれませんか？」

女の子が俺の手に持っている宝石を指差して語り掛けてくる。

うーん……これは俺の生命線だからなあ……

「騙されるじゃねえ！」

そいつはその宝石を持ち逃げする気だぞ！」

「んな！」

俺は俺を指差しながらでつち上げを言っている最強転生オリ主（笑）に驚愕した。

……！？こいつ……あの子に対する目……確実にあの子を性欲の対象にしか見てねえ！

「騙されるな！そいつの目をよく見ろ！お前を性欲の対象にしか見てねえ！」

俺は女の子に慌てて警告する。

「え、えと……『アルフ』……どっちが正しいんだろう？」

アルフ……それがあの狼の名前なのか？

「……………」

アルフが俺と最強転生オリ主（笑）に近づき……げ！？

「お、俺！？」

ヤバイ、殺される！

「（さあ、死にやがれモブキャラ！）」

「ふん、あたしが殺すのはあんたじゃないよ。」

あたしが殺すのは……こいつだあああああああ……！」

次の瞬間アルフが喋り最強転生オリ主（笑）を爪で真つ二つにした。

「ふん……こいつが『フェイト』をいやらしい目で見ていた事くらいあたしにはお見通しだよ。」

アルフが驚愕している俺を無視するかのように話す。

えと……狼が……喋った？

「あの……それを……くれませんか？」

俺がアルフの事で悩んでいるとフェイト（多分この子の名前だろう）が涙目＋上目遣いで覗き込んできた。

うぐ……どうしよう……

「………解ったよ、あんたの捜し物ならあんたの物だ。」

俺は結局フェイトに宝石を渡した。

さてと……退散しますか……

「！？危ない！」

「おわ！？」

退散しようとした俺の首根っこをフェイトに掴まれ……さっきまで俺の立っていた場所に凄い量の弾丸やら剣やら槍やら風やら炎やら……色んな物が打ち込まれた。

「死ねええええええええええ！！」

フェイトとのフラグ建設を邪魔するモブキャラがあああああああ
ああ！！！！！！

「うわ！？何時からこんなにいたんだ！？」

そこには神話で語り継がれてそんな美男子が沢山いて殺意剥き出しで俺に襲い掛かってきた。

「下がってな！いきなり現れたフェイトに何の疑問も感じずに『ジュエルシード』をくれた恩人を死なす訳にはいかないんでね！」

「うん...」

『バルディッシュ』、セツトアップ!』

アルフが今度は犬耳を残して大人の女性に変身し更にフェイトの体に黒のジャケットが装備され手に金色に光る刃を持った鎌が握られる。

「ハーケンセイバー！！」

次の瞬間フェイトの前に刃が出現し少年の一人をあっさり倒す。

その隙に別の奴が襲い掛かるけどそっちは……

「うらあ！」

即座にアルフに殴り倒された。

「ちーやっぱりフェイトとアルフのコンビは強い！」

みんな！今はモブキャラの奴ははほつといてアルフとフェイトの攻撃に集中するんだ！」

リーダーっぽい奴がそういうとなんと他の奴等がその通りに従ったのだ。

「月牙天翔！」

「
<
...
!」

「『Xバーナー』!」

「!?!?しま……うわあああああああ!?!?」

「フエイ……「うらあ!」がふ!?!?」

奴等が協力を開始した途端にフエイもアルフも苦戦に立たされる。こいつら……自分の欲望を叶える為に……その欲望の対象すらも傷付けるのかよ!ふざけるな!二人はお前達の道具じゃない!

『お怒りですか?マスター。』

!?!?誰だ!

『私の名は『インパルス』。』

い、インパルス!?

何で俺が乗っていた機体が此処に!?

『今はどうでも良いです。』

マスターはあの二人を救いたいですか?』

……救いたい。

「何かさフエイトやアルフとはあつて数分だけどあの二人の目を見て思ったんだ……『自分に何か出来ないかな……』って。」

『そうですか……ならば『魔法の言葉』を教えてあげましょう。』

「!?!?嘘だろ!?!?何でモブキャラが『デバイス』持つてんだよ!?!?」

『魔法の言葉……その名は『セットアップ』。』

セット……アップ……

「ああ……やってやるさ！」

インパルス、セツトアップ！」

そして俺の体が粒子に包まれ右手にビームライフルが出現し左手に盾が出現する。

更に背中にはバーニアが現れ装備される。

これは……

『そう、マスターの予測通りこれは『フォースシルエツト』です。』
やっぱね。

「行くぜ！」

「ち！相手はモブキ……「いちいちモブキヤラって言うなよ！五月蠅いんだよ、あんたは！インパルス、『ソードシルエツト』を展開！連結させて……『約束されし勝利の剣』！」は！？ギヤアあああああああああああ！？」

次の瞬間俺はリーダーっぽい奴に接近しソードシルエツトを展開、更に連結させて大剣にして頭の中に浮かんだキーワードを言う……
…凄まじい光と共に奴の体は塵も残さず消え去った。

「……ひ、ひいいいいいいいい！！？」「……」

指揮官が消え去ったのを見ると残りの奴等は恐れをなして逃げ去った。

何だっただんだあいつら？

「はあ……何とか生き残ったか……」

「だ、大丈夫？」

フェイトが心配そうに俺を覗き込んできた。

「ああ、何とかな。」

……えっと……あんたの名前は何？」

俺は『ある決意』を胸に秘めてフェイトに名前を問う。

「私？私はフェイト……『フェイト・テストロッサ』。それが私の名前。」

「そっか、俺はシン、シン・アスカって言うんだ。

よろしくなフェイト。」

「てめえ、馴れ馴れしい……」

「良いよアルフ、その人はさっきの奴等よりは信頼できそうだから。

」

俺はフェイトの言葉に安心しつつ提案をする。

「フェイト、俺にも宝石探しを手伝わせてくれないか？」

「「！？！？！？！？」」

提案にフェイトもアルフもびっくりした表情で俺を見る。

「……あんたもあいつらと同じか？」

アルフが殺気を俺に向けながら問う。

「違う、フェイト達に何があつたか知らない……だけど同時にあんな奴等野放しにしちゃいけないんだ。」

力に酔った奴等が此処にいたらこの街は酷い事になる。

そうなったら昔の俺みたいに家族が死んだりして一人ぼっちになつてしまう人間がいるかもしれない……そんなの嫌だ！

家族を理不尽な争いで無くすのは俺だけで充分だ！

「アスカ君……ありがとう。」

良いよ、一緒に集めよう。」

「シンで良いよ、一緒に集める仲間なのに他人行儀は嫌だぜ？」

「……ふふ、ありがとう。宜しくね、シン。」

「応！」

シン・アスカはまだ知らない。

この少女フェイト・テスタロッサが生涯の伴侶になる少女だと言う事を……

そしてこれが自分と同じようにこの世界に來たもの達と共に神に生み出された異分子《転生者》を削除する戦いの始まりだと言う事を……

プロローグ？（後書き）

如何でしたか？

今回は『00』の三兄妹がなのはに出会います。

次回『三つの誓い』《トリニティ・ハート》
『
お楽しみに！

プロローグ？（前書き）

三つの誓い《トリニティ・ハート》

プロローグ？

唐突だがいきなり時間軸は四年前に遡る。

ミハエルSIDE

「あ……………」

此処は……………何処だ？」

俺『ミハエル・トリニティ』は茫然としながら周りを見るがほのぼのとした公園の景色が広がっているだけでさっきまで戦っていた『ソレスタルビーイング』のガンダムや戦場だった島すらねえ……

「起きたか、ミハエル。」

「起きたの、ミハ兄。」

声に振り向くとそこには俺の兄妹である『ヨハン・トリニティ』と『ネーナ・トリニティ』の二人がいた。

「ヨハンにネーナか……………で？」

此処は何処だ？」

「此処は『海鳴市』そして今は『西暦2008年』だ。」

「……………は？」

つまりそれって……………」

「解った？ミハ兄、私達は『タイムスリップ』したってわけ。」

おいおい……………『タイムスリップ』とか洒落にならねえぜ……………」

「しかもだ、我々は全員同い年だ。そしてスローネが無い。」

ヨハンの言葉に俺は何でかネーナが同じ視点に入るうえに見慣れたガンダムが無いのに気が付いた。

まじかよ……

「ヨハ兄これからどうする？」

「うむ……私かミハエルが大人だったら働けるんだが……」

俺もヨハンもネーナも5歳児だから働くのは難しいし……最悪搔っ払いで食い繋ぐしか無いな。

「……………？泣き声？」

俺は耳に神経を集中すると微かにだが女のすすり泣きが聞こえてくる。

「……………行ってみよう一晩は宿をとれるかもしれん。」

ヨハンの意見に俺とネーナが反対するはずも無く俺達は泣き声のする方向に向かっていくとそこには茶髪をツインテールにした5歳児の女がブランコの傍で蹲って泣いていた。

「お、おい、どうした？」

俺は女に近づき泣いている理由を聞く。

「くすん……あのねお父さんがね……大怪我をしちゃってね……入院してるの……だから泣いてるの。」

「……………」

俺もヨハンもネーナも女の言葉に身が硬くなってしまう。

肉親が傷つく……それは何にも増して悲しい事だ。

もしそれが原因でネーナやヨハンが死んだとしたら……他殺だったら俺は犯人を地の果てまで追い掛けて復讐をするだろう。

「そうか……ならば私達に出来る事は無いか？」

ヨハンが女に自分達に何か出来無いかと訪ねる。

何も出来ないと思うけどな……

「じゃあ……話し相手になって。」

女が涙で濡れた目で俺達に言う。

……ま、それ位なら良いか。

……

「ありがとう、お陰ですつきりしたの。（にこり）」

あれから数十分後女の話し相手になった俺達は女……いや『高町なのは』と別れた。

因みになのはの笑顔で俺の顔が熱くなった事は内緒だ。

「ああ、此方こそ済まなかったな。」

「あんがとね。」

「おう、じゃあな。」

因みに俺達も名前を教えているからなのはに名前呼びを許可されたんだ。

「ヨハン君、ミハエル君、ネーナちゃん、じゃあね〜〜。」

とてとてと手を振りながらなのはは走って……あ、転んだ。

なのはは照れ笑いをしながら去っていった。

「……入るのは解っている。」

出て来い、出て来なければ……撃つ。」

ヨハンが近くの茂みに拳銃を向け警告しながら問う。

「……ち、見つかったか。」

「……見つかったわ。」

そこには神話（『エクシア』のパイロットだったら否定しそつだがな）に語り継がれてそんな美男子や美少女が七人いた。

こっちの二倍かよ……

「貴様達は何者だ？」

ヨハンが油断無く拳銃を構えながら問い掛ける。

「うるせえよモブキャラ共、俺のなのはに話し掛けてんじゃねえ。」
その答えにヨハンもネーナも苛ついたのかヨハンが拳銃の引き金に掛けている指に力を込める。

「質問に答える、貴様達は何者だ。」

「……僕達は転生者だよ、君達の様なモブキャラが話し掛ける事も出来ない崇高な存在なんだよ。」

「……は？転生者？」

馬鹿も休み休み言えよ。

「……」

あゝ二人も呆れてんな。

「あんた達に話し掛けたのは……死ね！」

「……」

俺達は女の一人から放たれた光弾を回避し散開する。

くそ！いきなり戦闘かよ！

「ふん、てめえらを片付けりゃなのはにフラグ建設を出来ないんでな！」

死んでもらうぜ！」

ち！理不尽過ぎるぜ！

俺は懷から拳銃を取り出すとそのまま無造作に刀を構えて接近してきた男の一人を撃つ……が……

「何い！？」

頭を撃ち抜かれた筈の男の傷が回復し俺に向かってきやがった。

「ふん、俺の『十二の試練』は十二回死ななきゃ死なねえぜ！」
だったら後十一回殺すまでだ！

俺は男に拳銃を乱射するが全弾避けられ更に蹴りを入れられてしまった。

「げふう……」

「きゃあああああああああ！？」

「ぐわあああああああああ！？」

悲鳴に振り向くと俺の隣にヨハンとネーナが吹っ飛ばされてきた。

「ぐ……！こいつらは力に振り回されて入るが力は本物だ……」

「畜生……『ドライ』があれば簡単に勝てんの……！！」

「畜生……此处までか？」

「……さあ死に……」

「ネーナ！」

そういいながら跳ねてきたのは……

「は、『H A R O』！？」

ネーナの持ち物だった人工プログラム球体『H A R O』だった。

「ネーナ、ヨハン、ミハエル、ガンダムの名を呼びやがれ！」

ガンダム……？

スローネの名を呼べば良いのか？

「……ミハエル、ネーナ……賭けるぞ！」

だな、生きるも死ぬも俺達次第だ！

「来い……『ガンダムスローネアイン』！」
「来やがれ！『ガンダムスローネツヴァイ』！」
「おいで！『ガンダムスローネドライ』！」
俺達が言葉を言つと手に宝石が出現し宝石が光ると……俺達はそれ
その機体の武装を装備していた。

「ガンダムスローネアイン、目標を尻ぎ払う！」
「ガンダムスローネツヴァイ、目標を咬み切るぜ！」
「ガンダムスローネドライ、目標を瞬殺するよ！」
俺達は転生者達に突撃を開始した。

……
「これで……仕舞いだあ！」
「ギヤアあああああああああああ！？」
俺は十二の命を持っていた奴を『GNバスターソード』で切り捨て
その戦闘は終結した。

周りには転生者共の死体しか無く俺達には傷一つついていなかった。
「やれやれ……で？」
ヨハン、これからどうする？」
「……転生者達を紛争幫助対象に指定し殲滅しようと思う。」
ヨハンの告げた言葉に俺とネーナは即座に頷いた。
あんな奴等を野放しにしていたら何が起こるか解ったもんじゃねえ
からな。

「何せネーナがいるからな『ヴェーダ』にリンクすれば簡単に見つ
かるぜ。」
「うんうん。」
「俺も頑張るぜ、俺も頑張るぜ。」

「ふ……高町なのはは何れまた合うだろう。」

その時までにはちゃんとした戸籍を用意せねばな。」

俺達は空に飛びながらふつと笑った。

あんなに俺達に純粹に接してきた奴はなのはが初めてだからな。

さてと……転生者共よ待つてやがれ……てめえらは俺達が一人残らず殲滅してやるぜ！

ミハエル・トリニティはまだ知らない。

高町なのはが己の生涯の伴侶になる少女だと言っ事を……

そしてトリニティ達は知らない。

これが彼等と共にこの世界に来たもの達と共に神に生み出された歴史を改変しようとする転生者達を駆逐する戦いの始まりになるという事を……

プロローグ？（後書き）

如何でしたか？

次回は無印の最初にトリニティ三兄妹が介入します。

次回『白の始まり、切り裂く深紅』
ホワイトマジャン・レッドスラッシャー

お楽しみに！

第一話（前書き）

白の始まり、切り裂く深紅

ホワイトマシヤン・レッドスラッシャー

第一話

あれから四年後……

ミハエルSIDE

「やれやれ……漸く来たぜなのはのいる学校にな。」

「ミハ兄、私達の目的は此処にいる転生者達を殲滅することなんだからあんまり余計な事を言つて転生者達にばれないようにね？」

「は、誰がんなへまをするかよ。」

「ほお……では前のミッションでそのへまをやらかしたのは何処のどいつだ？」

「兄さんの言う通りだよ。」

君が僕達を窮地に陥れたんだからね？」

「うるせえよ『フロスト兄弟』！」

「ミハエル、言い合いはお前の負けだ。」

フロスト兄弟もそう言うなそのへまのお陰で予定より早く転生者を炙り出せたんだからな。」

俺達は今学校への道を歩きながら言い合いをしていた。

なのはに初めてあつてから四年間俺達は転生者達と戦い続けたがその中で俺達と同じで『ガンダム』の名を持つモビルスーツがいる世界からこの世界に飛ばされた奴等も多数いるらしい。

『シャギア・フロスト』と『オルバ・フロスト』の通称『フロスト兄弟』もそうだこの世界に飛ばされていきなり転生者達と戦闘になったが自分のガンダムが『デバイス』（転生者共が言っていた言葉だ。）になっている事を知らなかったから二人共転生者達に叩きのめされていた所を俺達が助けてやったのでなし崩し的に俺達と共闘している。

因みに良い転生者達もいてそいつらのお陰でなのはのいる学校に最

低系転生者が入る事が解ったから俺達は学校に入学（最も転校生として設定だけどな）する事にしたんだ。

さてと……最低系転生者共よ覚悟しやがれ……てめえらの腐った野望（原作ブレイクやハーレム）は俺達『チームトリニティ』が打ち砕いてやるぜ！

……

なのはSIDE

「はあ……」

私『高町なのは』は今日みた夢を思い出しながら溜め息を吐いた。久々に『あの三人』に合った夢を見ちゃったな……

「姉さん、溜め息なんて吐いてどうしちゃったの？

らしく無いよ？」

と、話し掛けてきたのは私の双子の妹の『高町ゆい』。

因みに一分違いで産まれてきたらしくてお父さん曰く『死ぬ程びつくりした。』らしいの。

「あ、うん。ちょっと5歳の頃を思い出しちゃって。」

「5歳の頃？は~~~~ん……もしかして初恋の『ミハエル』君かな~~~~？」

「ふえ！？何で解ったの！？」

遊んだ事だけしか話してないのに！

「いや……姉さんにかまをかけてみただけなんだけど……凶星？」

「ゆい……お話をしようか？」

「すいませんでした~~~~~！」

私は殺気を出しながらゆいに接近するとゆいは凄く速さで土下座を

したの。

そんなこんなやっているうちに先生が来たの。

『え〜〜皆様いきなりですけど転校生を紹介します。』
至るところで『え?』やら『男子ですか?女子ですか?』やらの声
が聞こえるの。

「なのは、いきなり過ぎない?(ぼそぼそ)」

「うん、私もそう思う。(ぼそぼそ)」

私は小声で話し掛けてきた親友の『月村すずか』ちゃんに小声で答えるの。

『それでは皆さん入ってきて下さい。』

入ってきた五人の転校生の内三人を見て私は絶句したの。

「『ヨハン・トリニティ』だ。

これから宜しく頼む。」

「『ミハエル・トリニティ』だ。

みんなこれから宜しくな。」

「『ネーナ・トリニティ』よ。

みんな宜しくね」

「『シャギア・フロスト』だ。

今日から宜しく頼む。」

「『オルバ・フロスト』です。

兄共々宜しく願います。」

三人とも……久々だね。

……

オリ主(笑) SIDE

「ヨハン君、ミハエル君、ネーナちゃん、四年ぶりだね！」

「おうよ！」

「確かに久々だな。」

「なのはも綺麗になったじゃない。」

これでヨハ兄やミハ兄のお嫁さんになれるね。（笑）

「ふえ！？／＼／」

「何を言っている（言ってるんだ）ネーナ！！／＼／」

「冗談よ冗談。」

「（一体どうなっていやる？）」

俺『神崎終夜』は突然現れた『ガンダム00』のキャラクターである『トリニティ三兄妹』に似た（と言うかトリニティ三兄妹そのもの）三人の転校生が俺の嫁であるのはと親しく話しているのを見て苛立っていた。

俺はチート転生者で最強のオリ主なのに……本来はいない筈なのはの妹『高町ゆい』のお陰でなのはには知り合い以上友人以下程度にしか接してねえし……アリサやずずかは既に墮とせたけど妹のお陰でなのはとは殆ど話せねえし……

「（まあ、良い。」

今夜は『淫獣』がなのはにデバイスを渡す日だ。

そんな時にはにフラグを建設すれば良い。」

くつくつくつ……俺のハーレムは揺るがないぜ！

しかし神崎終夜は知らない。

彼を含む全最低系転生者がトリニティ三兄妹はおるかガンダムキャラクターの誰にも勝てない事を……

……

ゆいSIDE

私達は今へんてこな化け物に追い掛け回されていた。
え？何故こうなったかって？

原因は姉さんが塾から帰る途中でフェレットを見付けて動物病院に連れていったんだけど……夜になって姉さんが『フェレットさんが心配だから出かける。』と言って家を出て行って動物病院に行った……半壊した動物病院とその瓦礫の上で咆哮をあげる化け物があった。

で、今この状況って訳。

「はあ……はあ……ごめん……ね、ゆい。」

「良いよ姉さん、兄さん達に言わなかった私にも罪はあるし。」

息を弾ませながら謝る姉さん（姉さんは凄い運動音痴なんだ）に私は笑いながら許す。

……！不味いどんどん迫ってくる！

「（誰か……誰か来てー！ー！）」

私は叶わないと思いつつもつい神頼みをしてしまう。

死ぬのかな……私……

「おい化け物……なのはとその妹に……何やってんだあああああああああああああ？」

次の瞬間私となのは姉さんの間に大剣を背負った紅い影が舞い降りると化け物の右腕を肩から切り落とした。

その影は……

「み、ミハエル君……？」

今日転校してきた三人兄妹の次兄『ミハエル・トリニティ』だった。

「よ！なのはにゆい。」

困ってそうだから助けに来たぜ！」

「ミハ兄、速すぎ！」

「私も来ているぞ。」

振り向くとそこにはネーナちゃんとヨハン君も来ていた。

「さ、三人ともその格好……何？」

なのは姉さんの疑問は最もだ。

何せ三人は形や色、武装こそ違うけどメカニカルな鎧を着けていたからだ。

「色々合つてな。」

説明はまた後だ！」

ミハエル君が化け物に向き直りそのまま無造作に大剣を横風呂ぎに払い化け物の両足を一瞬で刈り取る。

「隙あり！」

そこに右肩にランチャーを背負った漆黒の鎧を着けたヨハン君が背中の中のポッドから大量のミサイルを放つ。

「それぞれそれ！」

更に背中に飛行機のようなパーツを着けた紫の鎧を着けたネーナちゃんがビームのマシンガンを乱射する。

「凄い……」

「うん……」

三人とも自分の距離を解っておりそれを外さない様に戦っている。

「止め……と行きたい所なんだが俺達三人とも『封印魔法』は使えないんだよなあ……」

ミハエル君が頭をかりかり掻きながら苦笑いをする。

ん？
封印？

「何か……出来ないかな……」

ミハエル君の言葉に疑問を持つ私の耳になのは姉さんの言葉が届く。

「私はお父さんが怪我をしちゃった時泣いてばかりだった……だけ
どあの三人のお陰で元気になれた。」

だから私は三人の助けたい……一緒に戦いたい！」

「なら……これを使うんだ！」

私達がいきなり聞こえてきた声に周りを見渡すと何となのは姉さんが抱えていたフェレットが喋っていた。

「.....え? ええええええええええ! ?」

私達はそりやあもう驚いたよ？

いきなり化け物に襲われたり転校生が武器を持っていたのと同じくらい驚いた。

「え？え？え？フェレットさんが喋った……」

「今は激しくどうでも良いから速く契約をするんだ！」

フレット(?)が私達にネックレスとペンダントを差し出す。

「姉さんはネックレスをお願い！」

「うん！」

私はペンダントを手にとった。……何故か荒野にいた。

「ふにゃ!？」

突如の事態に私は慌ててしまう。

「ほう……此処に『素質』のある人間が来るとは珍しいな。」
声に振り向くとそこには一人の髪の青年がいた。

「貴方は……？」

「私か？私は此処の管理人さ。

銘は『雪風』と言う。」

雪風が肩をすくめながら言った。

「さて……問おう、お前は私を使って何を為す？」
私の為したい事……

「なのは姉さんを守りたい。

それが今の私の願い!」「!？ほう……ならば高町ゆいよ汝を主人として認めよう。

神の傲慢により生み出された汚らわしき『転生者』を『介入者』と消し去る役目と共にな。」

そして私は元の景色に戻った。

「行こう……雪風!セトアップ!」

「行くよ!

レイジングハート!セトアップ!」

私となのは姉さんは同時に掛け声をあげ私の体は雪の様に白い鎧と血の様に紅い深紅の刀が装着されなのは姉さんの体には杖と白い制服が装着された。

「姉さん……行こう!」

「うん!」

第一話（後書き）

如何でしたか？

次回はちよつと飛んでフエイトとシンがなのは達と邂逅にします。

次回『インパルス・トリニティ激情と三つと転生者』

お楽しみに！

第二話（前書き）

インバルス・トリニティ
激情と三つと転生者

第二話

ミハエルSIDE

「……此処は猫屋敷か？」

俺達は今、月村すずかの家（正確に言えば屋敷だな）に来ていた。きっかけはなのはの兄貴が恋人であるすずかの姉貴の家に遊びに行くからそのおまけとして着いてきた。

そして入って俺が思ったのはすずかの屋敷にいる猫の数だ、庭に入るのを数えると二、三十匹は入るぞ。

「ま、くつろげるなら何でも良いけどな。」

ジュエルシードの暴走体を封印した後なのはとゆいはフェレット改め『ユーノ・スクライア』から魔法を知らされ更にジュエルシードの存在及び危険性を知らされた為にユーノのジュエルシード集めを手伝っている。

んで、昨日神社でジュエルシードが発生したんだがそこにいたのは仲間の転生者に聞いた姿（子犬から変化したケルベロス）とは違い二足歩行のライオンだった。

お陰でなのは達と子犬の飼い主の両方守るのに苦労したが最低系転生者である『神崎終夜』がフロスト兄弟（正確には二人が助っ人として駆け付けようとしているのを見てつけていたらしい）と共に助っ人として駆け付けてくれたお陰で何とかなっただぜ。

「（み、ミハエル~~~~~助けてくれ~~~~！）」

念話に振り向くとユーノが数匹の猫に追い掛け回されていた。

「（気合いで頑張れ！）」

「（そ、そんな殺生な~~~~！）」

俺があっさり見捨てると泣きに入るユーノ。

ま、食べられるわけじゃないから大丈夫だろ。

「（ミハエル！）」

ユーノの姿にニヤニヤしていたらヨハンが焦った様子で念話を送ってきた。

「（どうした？）」

「（此処にジュエルシードが一個あるらしい、手分けして捜すぞ！）」

んな！？マジかよ！？

「（解ったなのにも伝えとくぜ！」

なのは、ジュエルシードだ！この邸内に有りやがる！手分けして捜すぞ！）」

「（ええ！？解ったすぐに行くの！）」

「（シャギア、オルバ、聞こえつか！」

ジュエルシードが出たぞ！）」

ついでにフロスト兄弟にも連絡しておく人手は多い方が良いぜ。

「（さっきヨハンから聞いた。）」

「（ヨハンとネーナ、僕と兄さん、ミハエルとなのは、ユーノとゆいが組になって捜せだって。）」

シャギアとオルバの返事を聞き俺はすぐに行動を開始した。

.....

「ジュエルシードは何処だろうな？」

因みにユーノがさつき結界を張り巡らしたから暴れてもOKだ。

「…………あれじゃないかな？」

なのはが指差した方向を見るとそこには周りにある木ぐらい大きい猫がいた。

「おいおい……一体どんな願望を叶えたんだ？」

「あんなのに寄ってこられたらすずかちゃんが潰れちゃうよ……」
なのは、お前やっぱり天然だろ。

「ま、大人しくしている内に片付けるか。

ツヴァイ、セットアップ。」

「そうだね。

レイジングハート、セットアップ！」

俺がスローネツヴァイに似せた鎧を装着し（因みに俺は『ミッドチルダ式』の魔法が得意だ）なのはが白い制服状のバリアジャケットを装備する。

『フライヤーフィン』

なのはの靴に翼が装備され空を飛べる様になる。

さて行くとします……！！？

「危ねえ！！」

「ふえ！？／＼／」

俺がなのはを抱えて芝生を転がるのとさつきまで俺達がいた場所に緑色の魔力弾が当たるのが同時だった。

「ち、誰だ！」

俺が上を見ると……青と白の鎧を装着した紅い目に黒髪のカキと黒いバリアジャケットを装備している深紅の目に金髪の女が塀の上に

立っていた。

.....
シンSIDE

「く！外した！」

俺は茶髪のツインテールの女の子を狙って撃ったライフルの弾丸が青い髪の男の子に躲かれたのを見て舌打ちをした。

「しょうがないよ、シン。」

あの子の勘が良かっただけ。」

フェイトが慰めてくれたけど一撃で仕留めた方が戦うよりずっとましだ。

「戦うしか無いよな……行くぞ、インパルス！」

『了解しました、マスター。』

「行くよバルディッシュ！」

『イエス、サー。』

俺達は塀から飛び降りるとフェイトはジュエルシールドが変化させた猫と俺は二人と対峙した。

「君は誰？あの子は誰？」

何でジュエルシールドを集めようとするの！？」

茶髪のツインテールの女の子が俺に話し掛けるけど俺は無視してピームサーベルを引き抜きそのまま斬り掛かる。

「やらせるか！」

しかし青い髪の男の持っている大剣で防がれ弾き飛ばされる。

「力は向こうが上か……なら！インパルス！
ソードシルエットを！」

『了解！』

俺はフォースシルエットからソードシルエットに換装するとそのままエクスカリバーを連結させまた斬り掛かる。

「何度やっても無駄だ！」

「甘いのはあんただ！」

『紫電一閃』！

俺は即座に連結させたエクスカリバーに炎を纏わせそのままぶつける。

「おわあ！？」

魔力も編み込んだ斬激に男は吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ミハエル君！？許さないの！『デイバインバスター』！」

茶髪のツインテールの女の子が俺に桃色の魔力砲撃を撃ってきたけど俺はすぐさま防御魔法の（これしか使えないけどな）『ラウンドシールド』を展開して防ぐ。

「砲撃には砲撃だ！」

インパルス！

『ブラストシルエット』を！」

『了解！』

俺はインパルスのバックパックを接近戦用のソードシルエットから砲撃戦用の『ブラストシルエット』に換装させるとそのままブラストシルエットの最大武装の『ケルベロス』を放つ。

「な！？キヤアあああああああああ！?!？」

ケルベロスは女の子の砲撃を消し飛ばしてそのまま堀まで吹き飛ば

した。

「（フェイト、終わったか？）」

俺は念話でフェイトが封印を終えたか聞いてみる。

「（終わったには終わったけど戦闘になってる！）」

「（な！？待つてろ！すぐに行く！）」

俺はフェイトとの念話を終えるとそのまま駆け出した。

.....

オリ主（笑）SIDE

俺はたった今ジュエルシールドの回収を終えたと思われるフェイトと交戦していた。

どうやらなのはとミハエルは負けたらしい。

ふん……最強オリ主の俺を差し置くからこうなるんだよ。

「（最も、今はフェイトにフラグを建設しなきゃな！）」

行くぜ！『カラミティバスター』！」

俺は自分のデバイスである『セイグリッドハート』に砲撃魔法を放たせる。

「ぐー？」

『ラウンドシールド』

フェイトが慌ててラウンドシールドを展開するけど俺の魔力ランクは『SSS』ランクだから……

パライイイイイイイイイイイイイン！

「そんな……キヤアああああああああああ！？」

あっさりラウンドシールドを破ってフェイトを吹き飛ばした。

「力に振り回されている奴に俺は……負けない！」

「ぐはあ!？」

あっさり避けられビームサーベルでバリアジャケットを切り裂かれた。

「これで……終わりだあ!」『三つ首の魔獣よ、今こそ汝が食らうべき敵を見つけ食らい尽くせ』!

『ケルベロスバスター』!!」

「ぐあああああああああああ!？」

俺はモブキャラから放たれた砲撃をもろに受けそのまま気絶した。

第二話（後書き）

如何でしたか？

次回は温泉での戦闘です。

次回『白と激情、黒と剣士』インパルス&ホワイトマジシャン、ブラック&ソードマン』

お楽しみに！

第三話（前書き）

白と激情、黒と剣士

《ホワイトマジシャン&インパルス、ブラックマジシャン&ソードマン》

第三話

シンSIDE

あの自称最強オリ主を伸した後俺はフェイトをお姫様抱っこで空を飛んで隠れ家まで連れてきた。

あ、ちゃんと認識障害の魔法を使ったから一般人には見えないからな？

「ただいま〜」。

「シン、フェイト、お帰り……シン！フェイトは一体どうしたんだい！？」

帰るなりアルフが気絶したままのフェイトを見て血相を変えて俺に詰め寄る。

「ああ、俺を襲ってきた奴等の一味に攻撃されて気絶したんだ。」

「く……あたしがいたら何とかなったのに……！」

アルフが口惜しそうに気絶（というか寝ている）しているフェイトの顔を撫でる。

「ああ、その為にはさっさと終わらせないとな。」

……今夜もジュエルシードを捜しに行くからフェイトは起こすなよ？」

「……解ってるさ。」

シン……一応言っておく。あんたは良い奴だよ。

いきなり現れたフェイトやあたしに何の欲望も無しにジュエルシードを渡してくれてしかもジュエルシードを集めるのを手伝ってくれているんだからね。」

アルフがすまなそうに俺を見ながら礼を言う。

「当たり前じゃん、女の子にあんな奴等の相手をさせる訳にはいかないしそれに……地球の危機って聞かされて黙ってる訳にはいかないよ。」

下手をすれば地球消滅なんてヤバイ事になるような物はさっさと集めないと怖いからな。

「じゃあ、行つて来る。」

「ああ、行つてらっしゃいだ。」

俺はアルフにフェイトを預けて再び夜空に舞い戻り搜索を開始した。

……

ミハエルSIDE

「……………はあ。」

俺は今溜め息を吐いているのはを見てすまない気持ちになった。

あの後ヨハンに揺り起こされて目を覚ました俺達だったがどうやら神崎終夜も返り討ちにあつたらしく朝からむすつとなっていた。

「（ミハエル、お前はガンダムタイプの敵と戦ったんだな？）」

ヨハンが念話で俺に話し掛けてくる。

「（ああ、武装を換装してたしメカニカルな鎧も装備してた十中八九俺達のようにガンダムがある世界からきた筈だ。）」
シャギアやオルバの様にな。

「トリニティ三兄妹にフロスト兄弟、それから……粕。
なのは姉さんと私がアリサやすずかに『温泉に行かない？』って誘われたから来ない？」

と、ゆいが俺達を誘ってくる。
温泉か……悪くないな。

「解った、行くぜ。」

「大した予定も無いし行くわ。」

「予定も無いから行けるぞ。」

「たまにはジュエルシード捜しも忘れて休むとするか。」

「そうだね、兄さん。」

「おい、粕って俺の事なのか？」

約一名苦々しい顔をしていたけど温泉が楽しみで仕方ないぜ。

……

「ミハエル君、温泉一緒に入ろう！」

温泉旅館に来て少し休んだ後、なのはにいきなり言われた。

「……待て、待て待て待て待て！」

何で混浴なんだ！？大体俺達は男湯で……」

「ミハエル……」

ヨハンが壁紙を指差すとそこには『十二歳まで混浴可能』と書かれていた。

「な、何じゃそりゃ~~~~~!？」

「と、言う訳で行こう!」

なのはに首根っこを掴まれるが俺は道連れにヨハンの首根っこを掴みヨハンも苦し紛れにフロスト兄弟の首根っこを掴む。

俺達四人はそのまま女湯に連れ込まれた。

……

「たく……何が悲しくて狂暴女と一緒に温泉に入らなきゃいけない

いんだ？」

「ミハエル、それどういう意味かしら？」

俺が冷や汗をかきながら振り向くとそこには怒りの四つ角を浮かべた『アリサ・バニングス』がいた。

「あ……いや……その……」

「二回死ね！」

見事に俺はアリサのドロップキックを食らいぶっ飛ばされた。

「うつつ……酷い目にあつたぜ……」

「み、ミハエル君……／＼／」

声に振り向くとなのはが茹でた蛸の様に顔を真っ赤にしていた。

「何だ？」

「背中……流してくれない？／＼／」

……何でそうなんだ／＼！？

「なのは、頑張れ／＼／」。

ネーナああああああああああああ！！

お前の差し金か！？

「たく……わかったよ。」

俺は手にあつたタオル（何時の間に持ったんだ？）でなのはの背中を拭く。

「ありがとう……／＼／」

「どういたしましてだ。」

「あの野郎俺のなのはに……くぺ！？」

「空気を読め。」

……まあ、雑音も聞こえるけどな。

……
夜……

「ミハエル……」

「ああ……」

ヨハンが起きているのを見て俺は確信した。

「……ジュエルシードだ。」「……」

俺達四人＋ はデバイスを展開してネーナ、なのはにゆいと合流するとジュエルシードの発動地点目指して突き進み始めた。

……

シンSIDE

「フェイト、今回のジュエルシードは楽で良かったな。」

「うん。」

俺達は今、ジュエルシードの発動地点だった川原にいた。

今回のジュエルシードは発動して間が無かったのかそれとも元からそうだったのかわかんないけど異常に弱かったから速攻で封印できた。

……
……

「また会ったな！」

来たよ邪魔者が。

俺は嫌々ながら振り向くとそこにはこの前伸した自称最強オリ主が剣と銃が合体したようなデバイスを俺に向けていた。

「此処で合ったが百年目だ！」

覚悟しやがれ……「何処の時代劇だバカ者。」ぎゃふん!？」

最もすぐに茶髪をポニーテールにした女の子に首を捻られて気絶したけど。

「また……会ったね。」

話し掛けてきたのは前に倒した茶髪をツインテールにした女の子だった。

「まあな……」

俺はビームサーベルを構えて何時でも攻撃できるようにする。

「（シン、昨日戦った子なの?）」

「（ああ。）」

フェイトから来た念話に答えるけど構えは崩さない。

「ねえ……お名前……聞かせて?」

名前……

「シン……シン・アスカだ。」

「（シン!?!）」

あっさり名前を答えた俺にフェイトが驚く。

「だけど……知ったところで今から倒されるあんたには関係ない!」

俺はソードシルエットを展開してそのまま二刀流で斬り掛かる。

「姉さん!」

慌てて茶髪のポニーテールの女の子が血の様に紅い刀で弾き飛ばす。

「貴様……!何をする!」

「悪いな俺は……いや、俺達は目的の為には容赦なんてしない！」
俺はエクスカリバーを連結させてそのまま振るう。

「ぐ……！行くぞ『雪風』！」

『強化開始』《トレース・オン》！」

『承知した。』

そのまま女の子を押し切ろうとした俺はデバイスから魔力を供給されて身体能力が向上した（と見られる）女の子に投げ飛ばされた。

「うわ！？」

「隙あり！」

「シンを倒させはしない！！

バルディッシュュ！」

『フォトンランサー』

「ち！」

すぐに女の子が斬り掛かってきたけどフェイトから放たれた雷の槍に追撃は防がれた。

「（フェイト、ポニーテールの女の子は任せた！）」

「（オツケー、ツインテールの女の子は任せたよ！）」

「『なのは』！『ゆい』！」

助太刀するぜ……「させるかああああああああああ！」
な！？」

青い髪の男の子とその仲間達がやってきたけどアルフが足止めをする。

俺達はそのまま戦闘に突入した。

……..
ゆいSIDE

「行くよ！」

私は金色に光る刃を持った鎌を振るう金髪のツインテールの少女の攻撃を冷静に見ていた。

多分この子は高速戦闘を得意とするタイプの筈……だったら！

「距離を詰めるまで！」

雪風、『トレース・オン
投影開始』！」

『承知！』

次の瞬間雪風の刀が陰陽剣『莫耶・干将』へと変貌する。

「な！？だけど形が変わるくらいなら！」

金髪の女の子がそのまま鎌を振るってくるが私はそれを無視しそのまま斬り掛かる。

「ぐ……………！」

「畳み掛けさせて貰うぞ！『紫電演舞』！」

言葉と共に莫耶、干将に炎が灯りそのまま舞う様に斬り掛かる。

「く…………バルディッシュ！」

『ラウンドシールド』

私の前にシールドが展開され殆どの斬撃が防がれてしまう。
が……

「それが狙いだ！投影！」

私の手の莫耶、干将が消え盾とライフルと剣が一体化した武器『GNソード』が形成されシールドを袈裟懸けに切り裂く。

「な……………」

「投影…………食らい尽くせ『エア』よー！」

私は最古の英雄王が使っていた剣を振るい切り伏せ……る前に後ろからの砲撃を回避した。

桃色……なのは姉さん、暴れ過ぎだ。

私は苦笑いをしながら目の前の女の子に再び斬り掛かった。

……………

なのはSIDE

「シン君、何で君もあの女の子もジュエルシードを集めようとするの!?」

あれは危険な物なのに!」

「うるさい!

敵であるあんたには関係ない話だし話す気も無い!」

シン君は私に二つの剣を連結させた大剣で斬り掛かってくるけど私は冷静に受け流す。

「だったら……これに勝ったら教えて!

『デイバインバスター』!」

私は砲撃魔法を使ってシン君を攻撃する。

「またそれか……「前のままじゃないよ!『アクセルシューター! シュート!」な!? うわああああああああ!」?」

私はデイバインバスターが避けられた瞬間にそのままアクセルシューターを撃ってシン君を吹き飛ばす。

「く……! インパルス!

ブラストシルエットを!」

シン君の声と共に剣の代わりに大量の銃火器がシン君に装備される。

第三話（後書き）

如何でしたか？

次回は転生者（神崎終夜とは違い使い捨てです）視点で舞台はミッドチルダです。

次回『愚かな末路』

お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2537ba/>

魔法戦士リリカルガンダム

2012年1月13日21時54分発行